

成果報告書 概要

2014 年度助成 (実践期間：2014 年 4 月 1 日～2015 年 12 月 31 日)	
タイトル	子どもの自然とのかかわり
所属機関	伊勢原八雲幼稚園
役職 代表者 連絡先	学校長 長塚 益男 0463-93-4950

対象	学年と単元：	課題
小学生	年長・年中・年少組	教師の指導力向上を目指す教員研修、実験方法指導、教材開発
中学生	2014 年～2015 の 2 年間	子ども達の科学的思考能力の向上を目指す授業づくり、教材開発
教員		ものづくり(ロボット製作等)による、科学分野で活躍する人材の育成
○ その他		○ その他



実践の目的：	近年、普段の生活ではあまり経験しなくなった自然とのかかわりを多く持つための環境づくりを行い、子どもたちが自ら自然を感じ、かかわろうとする気持ちを育てる。
実践の内容：	土山作りを考えた当初は、業者に全てをお願いし、出来上がった土山で子ども達が遊ぶ計画を考えていたが、子どもたちと一緒に土山作りをすることにした。土が運ばれ、土山作りを保育者が始めると、早速『手伝いたい』と柄の長いスコップを持って子ども達が次々に集まり、土山作りがスタートした。土を高く積み上げる子や土の中から大小の塊を探し出すなどの化石集めごっこ、多くの子が土に興味を示した。土山に土管を設置する前には、大きな土山を使ってダイナミックにどろんこ遊びを行った。子ども達と約1年間かけて土山を完成させていったが、その間さまざま形を変える土山を通して、泥団子作りや工事ごっこ、かくれんぼや高才二など鬼ごっこに使用されるなど、さまざまな遊びが展開された。
実践の成果：	土山ができる以前は、土や水に触れる機会があまりなかった。しかし、土山作りを子ども達と一緒にに行ったことで、土山への興味関心が高まった。また、子ども達にとって身近な環境となったことで、日々の遊びの中で、自然と土山に足が向くようになった。そして、今の子どもたちにとって土山はなくてはならない場所となっている。その中で、子どもたちはさまざまに形を変える土に、想像力を働かせ遊びを展開している。穴を掘って化石を探すことで探究心が育ったり、水の量を調整しながら、いかに硬くてきれいな泥団子が作れるかなど、土と水の実験を繰り返している。また、土山があることで園庭に高低差が生まれ、駆け上ったり、下ったりと身体機能の向上にもつながっている。
成果として特に強調できる点：	子ども達が、土山という環境を自分たちで作っていくことや、その過程を見たり体験することは、貴重な経験だったと感じる。また、土山作りを通して土はさまざまな形に変化することを知った。土山は完成形ではなく、子ども達のイメージによって次々に形が変わり、様々な遊びが繰り広げられる貴重な場所となっている。

成果報告書

2014年度助成	所属機関	伊勢原八雲幼稚園
タイトル	子どもの自然とのかかわり	

1. 実践の目的（テーマ設定の背景を含む）
2. 実践にあたっての準備（機器・材料の購入、協力機関等との打合せを含む）
3. 実践の内容
4. 実践の成果と成果の測定方法
5. 今後の展開（成果活用の視点、残された課題への対応、実践への発展性など）
6. 成果の公表や発信に関する取組み
7. 所感

1. 実践の目的（テーマ設定の背景を含む）

近年、子ども達が体をおもいきり動かしたり、自分たちで考えた遊びを展開して楽しむ場所である公共の公園が減少している。また幼稚園の園庭においては、安全で汚れない場所であることの親からのニーズが増加傾向にある。実際に園庭を人工芝にしたり、水を砂場に持って行くことを禁止する親や園がある。本園でも、禁止にしていらないが、園庭を含めた環境設定を振り返ると土や砂、水を使って遊びを楽しめる環境にはなっておらず、数年前までは、砂場に水を持ってきてダイナミックに遊ぶ子ども達の姿は少なかった。しかし、本来子ども達は身近な自然素材である砂や土、水を手や足など体全身を使ってダイナミックに遊ぶことで、五感を刺激し楽しんでいる。本園でも、子どもたちが心を開放し、砂や土、水を使っておもいきり遊んでほしいと考え、子ども達が遊びたくなるような土山を作る計画を立てた。

2. 実践にあたっての準備（機器・材料の購入、協力機関等との打合せを含む）

1. 土山の設置

- ・計画当初は、業者に頼んで土山の設置を考えていたが、子どもたちにより身近に興味を持ってもらえるように土や土管を運んでもらい、職員が土山の形成を行っていく中で、子ども達も一緒に土山づくりに参加する。
- ・土管の出入口が、危険がないように保護ゴムを貼りつける。

2. どんご遊び

- ・どんご遊びに必要な大きな容器を購入

3. 記録用カメラの購入

4. ビオトープ設置

- ・どんご遊びの容器を使ってビオトープの設置
- ・有限会社猪俣官工事店と打ち合わせを行い、水の流れや排水場所の確認を行う。

3. 実践の内容

1. 土山作り

子ども達が幼稚園生活の中で自然の素材である土や水に触れる機会が少なく、汚れることを気にして土などに触れることを嫌がる子どもも多くいる。子ども達が自然素材である土や水に興味が出るように、園庭に大きな土山を作り、さらに魅力的な土山になるように、子どもたちが入れる土管を2本通したり、急な斜面やなだらかな斜面、大きなくぼみを作るなど、子どもたちがいろいろ想像を膨らまし、遊びが展開できるように計画を立てた。最初は、業者に全てをお願いし、土山を完成させる予定をしていたが、子どもたちにとってより身近な環境になるように、業者に土や土管を運んでもらい、保育者が土山の形成を行っていく中で、子ども達も一緒に土山づくりに参加出来るような状況を作った。土山を作るために、トラックがたくさん黒土を積んで園庭の中に入ってくると子ども達は一体何が始まるのだろうと、早速興味深々な様子。保育者が土をスコップですくって手押し車に乗せるなどの土山作りを開始すると、すぐに子ども達は「手伝いたい」と土山作りに参加してきた。実際にスコップを使って土を高くしようとする子や大きな塊を見つけて友達と力を合わせて運ぶ子どもも多くいたが、土山作りでなく大量な土に興味を持ち、土の塊を足で踏みつけて土がつぶれる感触を楽しむ子や小さな塊を集めて、化石集めをする子など、一つの素材でも子ども達一人ひとりのやりたいこと（目的）によって、さまざまな遊びが展開された。土山作りは、毎日のように行われ、約1年近く掛かったが、その際、男女や年齢にかかわらず多くの園児が手足を真っ黒にしながらかつて土山作りを楽しんでいた。

2. だろんこ遊び1回目

土山に土管を入れて完成する前に、土山に作ったくぼみの大量の水を入れ、大きなだろんこ風呂を作った。土山作りで汚れることへの抵抗がなくなってきた子ども達は、ほとんどの子がためらうことなく、だろんこ風呂に入ったり、土山の斜面を利用して滑り降りたり、友達や先生に泥をつけ合って楽しんだ。

3. だろんこ遊び2回目

1回目に行っただろんこ遊びは、普段経験できない程、思う存分だろんこになって楽しんでいたが、土山を使ってダイナミックに行った為、だろんこ風呂の底にあった小さな石で足の裏を傷つけた子が数名いた。事前にだろんこ風呂に保育者が入り、念入りに小石を取り除く作業は行っていたが、十分でなかった。そこで、怪我が起きるからだろんこ遊びを止めてしまうのではなく、どうやって行えば怪我に繋がらないかを職員会議で話し合った。その結果、土山にふくまれるすべての小石を取り除くことは困難であること、そこで、土山でなく大きな容器を使用し、場所を限定することで、より安全性が高められるのではないかと考え、大きな容器を3つ用意し行う事にした。2回目のだろんこ遊びは、土山から大きな容器を使ってのだろんこ遊びに変わったが、子ども達が水や土に触れ、感触を楽しんだり友達につけ合って楽しむ姿は、ほとんど変わらなかった。そして、怪我をする子もいなかった。

4. 土山の完成

土山は完成しても子ども達の工事ごっこは、終わりが無いよう引き続きスコップを持って今でも穴を掘ったり、化石を探したりと楽しんでいる。また、土山が鬼ごっこで使われることも多く、高オニで逃げる場所やかくれんぼとして土管に隠れている姿も見られる。

5. ビオトープ作り

だろんこ遊びで使った大きな容器を再利用できないかを考えたところ、ビオトープを作り、メダカなどの飼育を行い、子ども達がいつでも観察が出来、エサやりなどお世話をできる環境を作ることにした。また、水草を浮かべることで、メダカの繁殖やトンボの赤ちゃんであるヤゴが生息できる環境を作り、子ども達の遊び場に生き物や自然を感じられる環境作りを行った。

4. 実践の成果と成果の測定方法

1. 土山作り

子ども達の遊び場である園庭に土山が出来るということはとても大きな出来事であり、その土山が出来ていく過程を十分に見る、知る、そして経験することで子ども達にとってより身近な環境になると考え、子ども達が参加できる土山作りをスタートさせた。実際に、土山を作っていく過程で、子ども達の年齢に応じた姿が見られた。幼稚園の最年長である年長組は、保育者の真似をし、スコップを使用し、土を高く積みあげたり、足で踏みつけて土山を硬くする手伝いを行っていた。そして、山が高くなると、子ども達同士で力を合わせて運ぶなど、仲間と協力する姿が見られた。また、最初は「先生手伝っていい？」と保育者の手伝いをするという気持ちが大きかった子ども達だったが、日が経つにつれて、「先生手伝って」という声が聞こえたりと、自分たちの遊び場を自分たちの手で作っているという気持ちに変化しているように感じた。年中、年少組は、大量の土やその土の中にあった塊に興味を示し、化石（塊）集めや足でそれをつぶしたり、地面に叩きつけて遊ぶ姿が見られた。このような様子は、業者が作ってしまっていたら決して見られなかった姿で、小さい年齢の子ども達が土に興味を持つきっかけとしてとてもいい環境だったのではないかと考える。

2. 3. だろんこ遊び

土山が出来る以前に行っていただろんこ遊びでは、汚れることを嫌がり周りで様子を見ている子も多くいた。しかし、今回は毎日のように行われていた土山作りを通して多くの子ども達が、自然と土に対して抵抗がなくなってきた。土山が出来た大きなだろんこ風呂に躊躇なく入っていった。土と水が混ざることのでろどろとした感触になり、とても気持ちいいようで自分の手や体につけたり、友達につけたりと楽しんでいた。また、普段あまり関わらない友達にも泥を付け合う姿や、あまり大きな声を出して笑うことの少ない子も、緊張感がほぐれ、誰隔たりなく関わったり、笑い合う姿が多く見られた。子ども達一人ひとりの本来の姿が垣間見えた。そして、1回目に怪我をしてしまった子がいたが、辞めてしまうのではなく、どうすれば子ども達が楽しめ、さらに怪我が起きないかを検討し、2回目を行った。このことは実践の目的でも触れているが、汚れるからそして危ないからと言って子ども達からその環境を取り除いてしまえば、子ども達の経験できることがどんどん減少してしまう。どうしたら1回目と変わらない経験が出来、さらに保護者の方に理解していただけるのか。2回目は怪我をしないで楽しめることが重要だと考えた。また、だろんこ遊びだけでなく、普段の遊び（汚れてしまう遊びも含め）の写真をHPに載せていくことで情報発信をし保護者理解に努めた。

4. 土山の完成

子ども達にとって土山は身近な環境となり、日々の遊びの中で、自然と足が向かう場所となった。そして、土山作りを通して、土や水や力を加えることで、様々な形に変化出来る特徴を知った子ども達は、想像力を働かせいろいろな遊びを展開している。また、泥団子作りの遊びも毎日のように行われ、水の量を調整しながら、年長児は硬くてきれいな泥だんごが作れるようになってきている。そして、その様子を見ている年中、年少の子ども達も作り方を教わったり、見よう見まねで泥団子作りに挑戦するなど、自然と遊びの伝承が行われ、今後も泥団子作りが継続していくのではないかと考える。

5. ビオトープ作り

ビオトープが作られてから、「この中に何がいるの？」と興味津々で周りに集まってくる子がたくさんいた。最初に亀を放つと、大きな石や水草の下に隠れる習性を発見し、毎日のようにどこにいるのか探す子や、亀の甲羅に触れる姿もあった。その後も、金魚やメダカが増えるたびに、目を輝かせていた。また、ビオトープに興味を持った子どもが水苔を食べてくれるしじみや水を綺麗にしてくれるタニシを持ってきてくれた。生き物が増えたビオトープには、生き物の生態系が見られるなど、子ども達の興味関心が高まる環境が出来上がってきた。今回の活動を通して、子ども達にとって自然環境とのかかわりがとても大切だと学んだ。

5. 今後の展開（成果活用の視点、残された課題への対応、実践への発展性など）

まとめ

今回のテーマに掲げた「子どもの自然とのかかわり」は、幼児期にとってとても重要であると考えます。自然といっても幼稚園の園庭では限られた環境であり、その中で土という素材に絞り、大きな土山を作ることで、子ども達に自然とかかわれる環境を作った。泥だんごの事を例に挙げると、土は力を加えたり、水を混ぜることで、さまざまな形に変化し、そのことで子ども達は、遊びながらいろいろなことを試めすことができる。その中で、綺麗な泥だんごができたなど自分の中で納得のいく成功体験、失敗体験を繰り返し経験していく中で、自分の中の正解を見つけていくことができる。また、それが遊びで楽しいことや、やりたいという気持ちが芽生えるからこそ継続につながっていると考える。今後の課題としては、園庭の季節毎の変化を子どもと一緒に感じ楽しめるように、環境設定や保育者の視点を大切にしていく。小さな草花や虫にも目を向け、季節の変化を捉え、保育を行っていく。ビオトープにおいては、メダカの繁殖やヤゴが生息しやすい環境作りに図鑑等を使用し、子ども達と一緒に考えていきたいと考えている。また、今後もHP等で子どもたちの写真を載せることで情報発信し、保護者理解を深め、子ども達が思う存分楽しめる環境作りを目指していきたいと思う。

6. 成果の公表や発信に関する取組み

※ メディアなどに掲載、放送された場合は、ご記載ください

幼稚園の活動は、目に見える成果だけでなく、友だちとのかかわりや活動への取り組んでいく気持ちなど、目に見えない心身の成長が多くある。その人間の土台作りである幼児期の活動を、保護者に理解して頂くことはとても重要である。今回の活動を通して、数字や結果であらわれない成果は、HPを使って写真で子どもたちの様子を見て頂くことで理解に繋がっていくと感じた。

活動の取組み:HPで公開

7. 所感

今回、土山作りを通して、環境の大切さを学んだ。その環境とは、子ども達の思いを形に出来る土山であったり、それを見守る大人(人的環境)の視線や子どもへの関わり方も大事である。親や保育者が手や服が汚れたことを注意したり、嫌がる様子を見せると、子どもは自然に汚れることはダメな事と感じ、汚れることを避けて遊んでしまうのではないかと考える。幼稚園では、制服があるので帰りを体操服にすることで汚れることを気にせず遊べる状況を作った。また、保育者が率先して一緒にどろんこになって遊ぶことで、やってみようというきっかけになったり、心の距離が近づきより仲良くなるきっかけになった。公益財団法人日産財団の理科教育助成校のプロジェクトに参加させて頂いたことで環境を通しての保育の大切さを改めて気づくことができ、心より感謝致します。今回の経験を活かし今後の保育に繋げていきたいと思っております。